

## 招待状、配らないで！

18ES1017 林晏君 (リン アンケン)

皆さんこんにちは、協定留学生のリンアンケンと申します。今日は「招待状、配らないで！」というテーマについて、お話したいと思います。

「日本語、上手ですね！」と言われたことがありますか。留学生の皆さんは何回も聞いたことがあると思いますが、その時はどう思いますか。喜びますか。それとも自慢しますか。

これは、私が日本に来たばかりの話です。親に仕送りをもらうために、銀行に口座を作りに行きました。銀行の前で、私は勇気を出して、係の人に声をかけました。「すみません、ちょっとお聞きしたいのですが。あの、先週来たばかりの台湾の留学生なんですけど…」「あっ、日本語がお上手ですね。」しかし、その後は、日本語の能力を心配したのか、口座を作ることを拒否され、また後日、日本人の友達と一緒に来た方がいいよと言われました。がっかりした私は、「さっきは、本気で私の日本語がうまいと思ったのかな？」「嘘をついたのかな？」「もしそれがお世辞だったら、最初から言わない方がよかったのに…」と悩みました。

日本人は、その人は外国人だと知ると、挨拶ぐらいしただけでも、「日本語、上手ですね。」と言います。そこで、褒め言葉について考えました。ネイル、バック、髪型、メイク、手、足、身長、顔の大きさなど、褒められる点について、必ず見つけ出し、挨拶のように言い出します。台湾の場合は、心から尊敬する感情を持たないと、褒め言葉は言いませんので、どうして日本人はいつも人を褒めるのかという疑問がどんどん強くなってきました。

調べてみると、日本では、「お世辞」という言葉があります。それは、「相手に取り入ろうとして言う、心にもない言葉」です。しかし、中国語から見ると、「この世界からさようなら」という意味なのです。それはきっと、『褒め言葉』により、この世から一旦離れて、理想の世界に行きましょう！という招待状なのだろうと思います。

そこで、日本は、人々がその「招待状」を配りながら生成している社会だと気が付きました。日本人は褒める、褒められるうちに、「よしっ！肯定されたから、もっと頑張れる気がする。」という気持ちになり、人を励ますのだと思います。しかし、その逆に、心にもない褒め言葉だと、褒められた好意さえも失われると思います。

日本に来てから、いつも日本人の優しさや温もりに包み込まれていますので、日本の皆さんに一つお願いがあります。それは、お世辞という招待状を配らないことです。お世辞は決して嘘ではないと思いますが、私の日本語は上手ではありません。もしいつか、私の日本語が日本人でも日本人だと勘違いするぐらい得意になったら、その時は是非褒めてください。私もすごく嬉しいです！ご清聴ありがとうございました！